つまり、どのような状況で、子どもを作っても、ある程度の豊かな生活をしながら、「人並み」の子育てができる
子どもの存在が豊かな生活を送る負担にならないようにする。

親保険、子育て手当（専業主婦に対して）、再就職支援

子どもを産んでも、長期的に

③　若者の「夢」「希望」に関するずれ。
政府見解　働きながら子どもを育てることが女性の夢
そういう女性は、少数派（働かずに、好きなことしていられればよいと思う人が多い）

私の見解　昔は、「子どもをよりよく（学歴高く、よい職業）育てること」夢だった
それがもう無理であることを分かった上で、

そこそこ豊かな中で、趣味なり、ボランティアなり、ＮＰＯなり、評価される活動をすることに希望を見出すしかない。

（５－２）国において、民間において、地域において行う少子化対策　　まとめ
共働きでそこそこ働きながら、長期的に収入が得られる
若い人が長期的に

子育てをする若者に対する社会保障（子どもを育てる若者への所得移転）
（親保険、専業主婦（夫）手当、住宅優遇）

経済的豊かさ以外の希望の提示
（子育てという）努力したら報われるシステム
そこそこ豊かな中で、社会活動で評価されるシステム

（添付資料）

＜資料１＞

引き裂かれる家族の絆

山田昌弘（東京学芸大学助教授）

「家族を求める」「家族に求める」、この両者を区別して考えなければならない。これが、未婚化、少子化のみならず、虐待、ＤＶ（配偶者間暴力）、ペットの家族化、離婚の増大などの現象を理解する鍵である。

よく、「個人主義が浸透して家族を大事にしなくなった、家族を欲しがらなくなった」というストーリーが語られる。もし、現代の家族問題の原因が個人主義ならば、これらの家族問題は合理的に処理できるであろう。ここで、個人主義を「自分の欲求を満足させるために他人を利用してもよい」とする考え方だとしよう。しかし、多くの人は、自分の欲求を満足させるためだけに家族を求めているわけではない。

例として、「ペットの家族化」を取り上げてみよう。十五年前、私がペット家族論を展開した時は、年輩の家族社会学者からバカにされたものである。情緒的満足を与えてくれる一つの手段として位置づけられるのが、せいぜいであった。しかし、現実はどうか。ペットを家族と見なすという意識は確実に定着している。ペットの看病でノイローゼになったり、多額の治療費をつぎ込む人も多い（『ＡＥＲＡ』２００２・１・21号）。心がらくとろうが経済的に損であろうが、ここまでしなくてもたらす幸福感は本当の幸福とは違うといっても、ないよりはましなのである。特定の関係に固着することは、家族幻想の産物であるということは正しい。ただ、幻想と分かっていても、それにすがらざるを得ない人々がいるのだ。

未婚化、少子化問題に移ろう。ここでも、コンビニなど生活が便利になったから妻が必要ではなくなった、経済的に自立したから夫が必要でなくなった、高齢者福祉が整ったから子どもは必要でなくなったというストーリーが語られる。更に、女性が仕事をやめる機会費用が増大したとか、子どもは消費財になったとの経済学的説明がなされる。

確かに、結婚しなくても、たいがいの欲求は満足できるようになった。結婚の機会費用は増大し、一人の子どもを人並みに育てるためにかかるお金は増大した。家族を生活上の必要性という点から考える限り、家族は不要な存在となっている。

だからといって、結婚したい、子どもがほしいという欲求自体が消失しているわけではない。「絆」を持ちたいと思ったとき、結婚したり、子どもをもつことは、一番手近な方法である。未婚者が増大（二十歳以上の未婚者は、一八〇〇万人に達している）しても、結婚意欲はそう衰えていない。未婚者の九割くらいの人が結婚を望んでいる。戸籍上の結婚を望んでいない人でも、「パートナーが欲しい」など、家族的関係を持ちたがっている人が多い。子どももしかりである。手間とお金がかかる不妊治療をしてまでも自分の子どもをもちたいと願う人は多い。子どもがいらないという人でも、他者（主に配偶者）とのつながりは求めているのだ。

しかし、「絆」なら、誰でもよいというわけではない。結婚さえすれば、子どもさえいれば幸せという人はめったにいない。結婚するなら、経済生活、感情生活共に自分の欲求を満たしてくれる相手である方がよい。子どもをもつなら経済的に恵まれた条件で育てたいし、子育ては楽しみでありたい。

家族は共同生活の場である以上、「家族に」生活上の欲求充足を求めてしまう。

つまり、家族には、①かけがえのない存在としての家族という側面と、②生活上の欲求を満足させてくれる存在としての家族という二つの側面がある。経済の高度成長期までは、この二つの側面は、何とか折り合いをつけて同居していた。しかし、一九七五年頃から、この二つの側面の対立が顕在化してきたのである。

ＤＶやペットの家族化といった現象と未婚化、少子化、離婚の増大といった現象は、裏表の関係にある。かけがえのない存在を諦めきれず、生活上の欲求を断念するケースがＤＶなら、生活上の欲求の切り下げができないゆえ、かけがえのない存在がなかなか見つからないのが未婚化なのだ。

対立が顕在化した理由は、社会の発展によって、「かけがえのなさ」と「生活上の欲求」の水準が上昇したことにあると考えられる。「家族を求める」「家族に求める」、肥大化する二つの欲求に引き裂かれつつあるのが今の社会の姿である。この二つの欲求に折り合いをつける術を個人は身につける必要がある。また、二つの欲求の対立が問題となった時は、我々は、それを社会的課題として、対処する仕組を作らなければならない。家族は自然にしていればうまくいくという時代ではないのである。

文芸春秋　四月臨時増刊　第80巻5号

子育てに夢をもてる社会づくり

――少子化の背景、子育て世代の意識、現状と課題

東京学芸大学教育学部助教授
山田 昌弘

1. 経済的ゆとりの大切さ

数年前、ある自治体で、少子化に関する講演会を行った時のことです。質問時間になると、ある女性が手を挙げて言いました。

「山田先生のお話は、結婚すると生活水準が下がるとか、子育てにはお金がかかるとか、経済的なことばかりです。物の豊かさよりも心の豊かさの方が大事なのでは……」

その時は、「心の豊かさも大事だが、物の豊かさも大事なのでは」と答えておきました。

講演が終わった後、別の女性が近づいてきて、小さな声で、「山田先生の言ったことは、本当によく分かりました。物の豊かさよりも、心の豊かさが大事なんて言う人は、決まって金持ちなんですよね。私なんか、夫の給料がもう二、三万円多ければ、心のゆとりももてますのに」とささやかれました。

そうなのです。心のゆとりをもって子どもを育てるためには、ある程度の経済的ゆとりが必要なのです。もちろん、経済的ゆとりがあっても、子育てが楽しめない人は結構います。しかし、経済的ゆとりがなくて、心のゆとりがある人には、めったにお目にかかれません。

十年くらい前に、『家なき子』というテレビ・ドラマの中で使われた、「同情するなら金をくれ」というフレーズが流行語になりました。私は、声を大にして「子育ての楽しさを語る前に、金を出せ」、いや、言い過ぎました、「意識を変えることも大事だが、子育て中の若者たちの経済的基盤を整備する方がもっと大事です」と言いたいのです。

2. 「人並みの生活」が豊かな現代

だれしも、経済的に余裕のない中で、子育てをしたいとは思わないでしょう。もちろん、豊かな日本社会です。子どもを何人産んだとしても、飢え死にすることはありません。しかし、人間はパンのみによって生きているわけではありません。せめて「人並みの生活」をしたいと思います。

特に、子どもをもつと、せめて、「おけいこ事の一つはやらせてあげたい」「個室を与えたい」「パソコンに早く触らせたい」「能力に合った学校に入るために塾に行かせたい」「大学まで行かせたい」と思うのが親心でしょう。もちろん、おけいこ事や塾、大学に行かせなくても、個室やパソコンがなくても子どもは育ちます。でも、周りの子どもが個室を持ち、おけいこ事に行ったりしている中で、いくら心が大事だと言っても、そのような物や事なしに子育てをするのは、相当つらいはずです。子どもに惨めな思いをさせるくらいなら子どもをたくさん産まないというのが、近年の少子化の原因なのです。

こう言うと、必ず、「一昔前の親は、貧しい中でたくさん子どもを育てていた」という意見が出てきます。しかし、日本全体が豊かでなかった経済の高度成長期（一九五五年～一九七三年）ごろまでの子育てと、いまの豊かな時代の子育てを比べることはできません。高度成長期までは、人並みの基準、つまり子育てのレベルが低かったのです。おけいこ事に行ったり個室を持ったりしている子は、ほんの一握りしかいませんでした。

「豊かな社会」とは、豊かな生活が人並みとなり、そのレベルを維持するコストが高くなる社会なのです。

3 豊かな生活は最低条件

そして、昔の若い親には、「希望」がありました。それは、いまの生活はそれほど豊かでなくても、将来、子どもが大きくなるころには、生活が豊かになっているはずだという期待です。「希望は努力が報われると感じられるとき生じる」とは、社会心理学者ランドルフ・ネッセの言葉ですが、夫は家族のために外で働いて生活費を稼ぎ、妻は子育てや家事を一生懸命やっていれば、いつか、「豊かな家族生活」が送れるという夢をもてたのです。

豊かな生活とは、広く快適な家に住み、家電製品に囲まれ、時々旅行などができ、子どもの高等教育費を払える生活です。この夢があったからこそ、時間的、経済的余裕がなくても、子育てという「苦労」を乗り切れたのです。

しかし、いまの若い人たちにとっては、豊かな生活はもう夢ではなく、確保すべき「最低条件」になっています。その上に家族生活の夢を描くとしたら、子どもと一緒にレジャーやボランティア活動をするといった「コミュニケーション活動」となります。ところが、これらの活動をするためには、「経済的余裕」と「時間的余裕」の両方が必要なのです。

しかし、ここで、若い人たちは大きな壁に突き当たります。子育てをしながら、経済的・時間的余裕を確保することが難しいのです。若い男性の収入だけでは余裕のある経済生活を送るには少な過ぎます。その上に、雇用も不安で、将来収入が上がる見込みも怪しくなっています。専業主婦で時間的ゆとりをもとうとしても、それを支える収入を稼げる男性の数は確実に減少しています。共働きで経済的余裕を確保しようとしても、女性の賃金が低く、また保育所が整わず、労働時間が長い現状では、男女とも時間的余裕を失います。

子育てに夢をもてる社会とは、子育て中の若い人たちに、「経済的余裕と時間的余裕」を保証する社会のことです。そのためには、「男女とも」そこそこの収入を稼ぎ経済的余裕を確保しながら、時間的余裕を失わない働き方が求められます。その条件を整えるために、社会全体で「お金」を投入する必要があるのです。

やまだ まさひろ 一九五七年東京都生まれ。東京大学文学部社会学専攻卒業。同大学大学院社会学研究科博士課程終了。東京学芸大学助手、専任講師を経て、九一年より現職。著書に『パラサイト・シングルの時代』『家族のリストラクチュアリング』など多数。

子育て世代に経済的・時間的な余裕を保証する社会へ

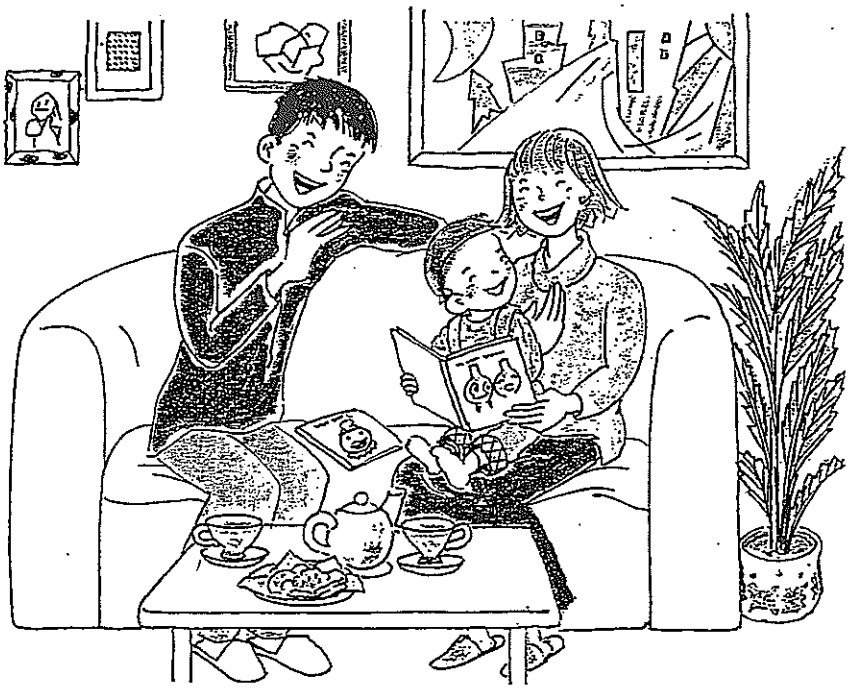

イラスト しかのるーむ

【レポート提出依頼文書】

平成１４年４月８日

少子化社会を考える懇談会メンバー　各位

第２回少子化社会を考える懇談会への文書提出のお願い

平素より懇談会の運営について御協力いただきありがとうございます。
さて、先日の第１回懇談会において座長からもお願い申し上げましたが、第２回懇談会に、メンバーの皆様から少子化社会に対するお考えを文書で提出していただきたいと考えております。お忙しいこととは存じますが、下記要領で作成の上、事務局まで御提出ください。よろしく御協力お願いいたします。

記

○　題　（１）少子化の要因と今後の少子化の見通しについて
（２）子どもは親の所有物であるという意識（子どもは親のものという権利意識と子育ては親がしなければいけないという義務意識）が我が国では強いと言われているが、それについてどう考えるか。
（３）どうすれば、子供を産み育てようとする気持ちになるのでしょうか。またその理由について
（４）政府は少子化の流れを変えるため、男女共同参画社会の実現や少子化対策を講じ、また、各界の方々からなる国民会議を開き、子育てにやさしい環境整備を求めていますが、これまでの取組みに対する問題点やその理由について
（５）国において、民間において、地域において行う少子化対策について
（６）その他御自由にお願いします。

○　様式等　Ａ４縦の用紙に、横書き（全体で１０枚程度以内）

○　期　限　平成１４年５月１３日（月）

○　送付方法　郵送又は電子メール